

個のうちなる普遍について On the Universal in an Individual

丸山 博道
Hiromichi MARUYAMA

われわれの経験が、あくまでわれわれのものであるということは、次の2つの意味がある。

1. われわれの経験は、およそ描きうるすべての即自的存在者の尺度ではない。

2. しかし、われわれの経験は、

われわれがそれについての概念を持ちうるすべての存在者と

外延を同じくする。

(経験は、物自体の正しい尺度ではないけれども、その延長上に物自体を捉えているものである。)

Maurice Merleau-Ponty

目次

- . はじめに
- . コード変換の意味.
- . コード変換の例
- . 精度を上げる試み
- . 揺るがし難い認識
- . 個別性のうちなる普遍性
 - 1. 乗り越えられるべきものとしての小スキーマ
 - 2. 個別的なものに分有された類型から普遍へ
 - 3. 生きた結びつきこそ
- . おわりに

. はじめに

Maurice Merleau-Pontyは、「人間のうちなる形而上学(Le Métaphysique dans l'Homme, Revue de Métaphysique et Morale, 52, 1947)」¹⁾において、当時、心理学、言語学、社会学、歴史学、等の人間諸科学の中に興ってきた共通の新しい流れと、旧来の科学主義とを対置し、それら新しい流れの中に見え隠れする、＜存在を現象化させる当のもの＞を形而上学として定式化した。

この論文の言語学批判の箇所に次のような文がある。

「言語は、話者の周りにあって、

その固有の惰性・要求・強制・内的論理を備えた道具でありながら、

言語はつねに

話者たちの創意に、

(そしてさらには、侵入・流行・歴史的偶発事といった粗野な寄与にも) 開かれており、

意味のズレ・多義性・機能的代用といったものを

いつも受け容れることができねばならない。」²⁾

しかし、それらを<わたしの言語>の中に受け容れるためには、いくつかの手続きが必要であるように思われる。まず文脈再現のための<わたしの言語>によるコード変換、次に、侵入・流行…への配慮、その用法からの意味構成・心理的背景の推定。最後にこれらの統合である。意識が直列処理を誘導することは、禁じえない事実であって、熟練したピアニストが初見で演奏してみせるようなわけには行かない。こうして理解が統合され、より緊密な言語下の図式(形態)が構成された後に、理解はようやく意識から解放され、図式との交流が実現するのである。

ところで、Merleau-Ponty は、みずから、

「哲学なき科学は、文字通り自分が何を語っているかを知らない。

諸現象の方法的探査を伴わない哲学は、形だけの真理、つまり誤謬にしか到達しない。」³⁾

と語っているが、残念ながら、その論文の性格上、方法的探査を省いている。

わたしはゼミの学生たちに「自己の分析」を課しているが、たまたまかれらの日記を解読する必要に迫られ、まさにわたしの言語の受容性を拡大せざるを得なくなったので、この小論において、Merleau-Ponty論文に欠落している方法的探査の試みとその意味を論じながら、表現がその形態(Gestalt)を呼び覚ますことが、意味理解の根本的な姿であるという認識の確認と、その実践こそいま・ここ>の問題であることを強調してみたいと思う。

・コード変換の意味。

学生に自己の姿を分析させる目的で、本音を条件に日記を書かせた。ところが、若者特有の言葉で綴られたそれらの日記は、容易に消化し得ない対象として、違和感のあるものとして、行く手に立ちはだかった。その用語も用法も、わたしの日常をはるかに超えていたのである。しかしながら、研究室に出入する学生たちの援助を受けながら、すべての文に対して、いわゆる伝統的な用語への翻訳(コード変換)を試みてみると、確かに、そこには一定の彩が立ち現れ、はじめて幾分かの意味の疎通が実現したように思えたのである。その翻訳文は、日記を書いた当人に見せて確認を得ているので、甚だしい誤訳はないものと考えるが、かれらもまた逆の立場で同じように戸惑ったことは明らかである。

若者言葉で表現される心の彩は、伝統的用語では表現しきれない、まさに痛ましさとたくましさを伴っている。それはかれらの行動全体を見つめる時に、強く感じられることであ

って、かれらの行動はまさにその言語表現と合致した色合いを呈している。形態というものは、その表象において、その外的表現と無縁ではありえない。つまり、行動と形態、形態とその外的表現とは響き合う関係にある。これが、かれらの表現からわれわれの形態を呼び覚ますことが困難なほとんど唯一の理由であろう。

他者にとって最も直接的理解が可能となる部分は、行動の因果的連鎖の中に見出される意味的連関である。一方、そうした連関を自分の中に引き起こす時に動員される諸形態があり、そうした形態に響き合う自分の言語表現がある。これがかれらの表現とわれわれの表現を結ぶほとんど唯一の絆であるが、こうした連関の把握は、緊密な世代間交流によってのみもたらされる。しかしながら、かれらは『孤児の世代』とも呼ばれうような気の毒な世代であって、遺憾ながらわれわれとの交流は希薄である。したがって、われわれがかれらの文章を読むには、かれらの表現の意味するところを推定し、行動を推定し、その連鎖から意味の修正を行うという循環過程を踏襲せねばならない。

われわれは自分たちの形態を放棄することはできない。われわれはそこに意味の起源を有しているからである。それはかれらも同じことである。かれらの形態に合致した表現（若者言葉）は、われわれの形態を多岐にわたって分散的に刺激してくる。われわれは、それらの中から比較的強く呼び出される形態を選び、それに合致する伝統表現で、かれらの表現を置き換える。これがこの循環過程の最初の一步である。

むろん、比較的強く呼び出された形態が、かれらの形態に一致している保証はない。われわれは、こうして第一歩目の意味の推定を用いて、かれらの記述にある行動連鎖の意味を推定する。行動連鎖の因果性だけが、われわれと共通する基盤であるから、これを指針にして意味推定の近似過程を循環させるのである。

必要ならば、こうして得た解釈を、かれらになげ返してみればよい。世代間のギャップは必ず存在するものであって、それを理由に、意思の疎通に臆したり、第0次の近似の労を怠ったりしてはならない。表現も解釈もともに不十分な状況の中では、繰返し、表現と解釈を伝え合うことが、唯一、事態を救いとることになる。

．コード変換の例

日記文以上に、若者言葉が現れてくるものが携帯電話のメールである。

「happy やら crazy やらってあたしか！おとーさんのメアドはまたみんなで改造するぞ！
てか暗証番号わかったの？」

これは、「おとーさんの」、すなわちわたしの、「メアド」、つまり携帯のメールアドレスを変更した際の連絡に対して、ある女子学生から届いた返信である。わたしのメアドは、姓名をローマ字表記したごく詰まらないものであった。

丸山 博道

「漸く携帯のアドレスの変更ができました．

xxx.xxxx@xxx.ne.jp

です．happy でも，crazy でもなくて，つまんないなんて言わないで下さい．

僕はただのオジサンなんですからね．

しかし，実は自分でも詰まらないと思っているんです．

…」

学生のメールをコード変換したものが次の文である．

「happy とか crazy とか，（おとーさんが言っているのは）私の（メアドの）ことなんですね．失礼ね！おとーさんのメアドは，また皆で寄って集って，きっと改造するわね！ところで，暗証番号はどうして分かったのかしら？」

こうした文章は，私自身の形態に合致するように変換したもので，あの年頃の学生が，それなりの嗜みを以って先生である私に，しかし親しげに話し掛けている場合に，かくあって欲しいという願望が入っている．第三者から見ると，大分違うのではないと思われるかもしれない．学生のメールは，非常に碎けていながら，簡潔で洗練されているし，私の翻訳文は，どこか改まっていて，冗長である．しかし，こうやって，一つ一つの文について，その息遣いをたどって行って，わたしにとって最もしっくり来る表現において，それを受け容れるということが，わたしにとって最も生き生きと理解することなのである．交換される言語表現は，きわめて曖昧なものであるが，それによって惹起される形態は，Merleau-Pontyの言う，あの不思議な親和力によって，揺るがし難いものとして現出してくるのである．かれは次のように言っている．

「『ある人を見ている』と言う時，

わたしは，目撃しているその人の行為，

すなわち，わたしの志向を不意にとらえて，それを眼に見える形で実現してくれているその行為への共感に襲われているということだ．」

「われわれの経験には他人のうちへと移行してゆく不思議な力があるということが確かめられるのも，われわれがまったく放棄することも完全に近づくこともできない真理が，基礎をおいているのも，われわれの差異そのもの，われわれの経験の独自性のうち，においてなのだ．」

「わたしの経験は，

それがまさしくわたしのものである限りにおいて，

わたしを，わたしならざるものへ開いてくれるということ．

わたしとは，世界と他人とを感ずるものだということ．

こうしたことを認める時に，（客観的思考が引き離していた）すべての存在者が近づいてくる．」

「わたしはすべての存在者との，わたしの親和力を認めているのであり，

わたしはそれらに飮し、それらを理解し、それらに応答する能力以外の何ものでもない。」

「わたしには、

わたしの生が、絶対的に個別的なものであり、かつ絶対的に普遍的なものである

ように思われる。」

「過去と現在のあらゆるものに生気を与え、それらから全生命を受けとる、個別的な生

——いっさいの期待に背いて、それらの生からわれわれに発出してくる光——

この認識こそが、形而上学的な意識なのである。」

「最初は、相反するものが向かい合っていることの発見の驚きがあり、

次に、行為の単純さのなかで行われる、それら相反するものの同一性の認識がある。」⁴⁾

あらゆるものに生気を与え、そこから全生命を受けとろうとするのは、生の矛盾を受け、それを理性に転じようとする個別の生なのだと、Merleau-Ponty は言うのである。

．精度を上げる試み

ここでは、翻訳の精度を上げるための作業の紹介をしてみることにする。次は学生の日記の一部である。

「いつもいる友達4人組じゃなくて、その友達の中の私を含めて3人で久しぶりに遊んだ。うちらは、毎日ってほど学校で会ってるのにマジあんまり遊んでなかったから、かなり嬉しかった。その日は友達の家で暇してて久しぶりに飲みに行こうって事になって、大曽根のXXXに行った。…」

こうした文章を、原則的に一文づつ、翻訳して、学生に返したものが、次のものである。

「いつもの4人組ではなく、その中の3人で久しぶりに遊んだのね。

わたしたちは、殆ど毎日学校で会っているけれど、あまり遊んだことがなかったので、かなり嬉しかったわ。

その日は友人宅で手持ち無沙汰だったので、飲みに行こうということになって、大曽根のXXX という飲み屋に行ったの。…」

しかし、いま読み返してみると、もっと様々なニュアンスを汲取ることが可能であった。この引用文に対して、文単位でそれを試みる。

1. 「いつもいる友達4人組じゃなくて、その友達の中の私を含めて3人で久しぶりに遊んだ。」

『いつもいる友達』という表現は、「いつもいつも一緒に居る友達」というだけでは済まない関係を表しているに違いない。そこには少々うんざりするような、拒絶的な雰囲気漂っている。しかし、翻訳文には、それが一切ない。なくて良いわけではないが、当初は考えが及ばなかったのである。

『…じゃなくって』という表現には、したがって、開放感があるはずである。

『その友達の中の私を含めて3人』とは、「その4人組の中の3人」ということであろうか。「ひとりを外した3人」という事実が婉曲に表現され、「自分は集団に属している」という事実を強調している。かれらは仲間にいること、あるいは仲間から離反するということが、非常に強く意識されていることを伺わせる。翻訳文には、そうしたニュアンスは一切含まれていない。翻訳文は、筋書きを追う程度のものである。したがって、いま、改めて翻訳をしてみると、次のようになるのだろうか。

「少々うんざりしているいつもの4人組から解放されて、その中の気の合う3人だけで久しぶりに遊んだのね。」

2. 「うちらは、毎日ってほど学校で会ってるのにマジあんまり遊んでなかったから、かなり嬉しかった。」

『毎日って』は「ほんとに毎日毎日」であろうか。

『マジあんまり…』は「真面目に言って、余り」であろう。真面目とは、真剣な態度のことだが、かれらは日常、「マジ」を「冗談ではなく、本当に」という意味で使用しているように見える。

「マジで？」…「冗談じゃなくて、本当のことを言っているの？」

「マジ汚いね」…「冗談じゃなくて、本当に汚いね」

「冗談でなく＝ざれごとでなく」というところが、彼らにとって「真面目なこと」の意味であるらしい。また、「冗談でなく」と断わるところが、「冗談のように見えている」ことを暗示している。それは「嘘のように見えている」ということだ。したがって『マジあんまり遊んでなかった』ということは、「嘘のように聞こえるかもしれないけれど、冗談ではなくて、本当に、遊んでいなかった」ということらしい。とすれば、実に簡潔な表現である。

『かなり嬉しかった』とは「嬉しいと言えるに十分なほどであった」ということであろう。しかし、文脈的には、もっと程度は高くなければならない。したがって、

「ほんとに毎日毎日学校で会っているのに、嘘みたいにもわれるかもしれないけれど実際、余り遊んだことがなかったの、とっても嬉しかった。」

3. 「その日は友達の家で暇してて久しぶりに飲みに行こうって事になって、大曽根のXXXに行った。」

『暇する』とは、「暇な状態である」「暇である」（自サ変のスル）であろう。

『行こうってこと』という促音便が用いられているのは、気持ちの高まりを表現しているのである。したがって、

「その日は友達の家で手持ち無沙汰だったので、『久しぶりに飲みに行こうよ』ということになって、大曽根の XXX に行った。」

若者は、結構古い言葉を使ったり、音便形や短縮形を多用している。「ため口」の「タメ」、「まじめ」の「マジ」、「～という」の「～って」、「～というか」の「てか」といった類がそれである。外来語に対しては、「メールマガジン」の「メルマガ」、「メールアドレス」の「メルアド」、さらには「メアド」というのがそれであって、短縮形は一般的な傾向であるが、外来語でなくても、概ねその傾向はある。しかし、短縮形にならない音便もある。「あまり」の「あんまり」がそれである。おそらく、語の長さは、かれらの気持ちの処理速度に依存しているのであろう。こうした表現は、かれらの形態のかなり忠実な反映であるという仮説は、かれらのテキスト解読に際して、われわれの注意を喚起してくれる。

こうした作業を通して、翻訳の精度を上げることによって、学生の心の動きにそった、ますます揺るがし難い緊張した形態が現出してくる。

．揺るがし難い認識

この日記を書いた学生は、『いつもいる 4 人組』に対して、懷疑の眼差しを向け始めている。そのきっかけは、進路決定が焦眉の急となって、曖昧な生き方と一線を画す必要に迫られ始めたからであろう。4 人組は、Merleau-Ponty が『小説と形而上学』⁵⁾の中で述べている『共同存在』（ボーヴォワールの『招かれた女』）であり、筆者がいくたびか言及してきた『自閉集団』⁶⁾である。各自の意識は集団の関係性の中に束縛され、外界へ向かない。自我は極限的に小さく、自分たちは常に世界の中心にいたのである。就職活動はしているが、当面、成功の兆しはない。そうした状況の中で、少しずつ自分たちの関係に疑問を感じ始める人間が出てくる。旧来の関係では居心地が悪くなるのである。しかし、こうした共同存在が、小さな自我を救済してきたという事実は、かれらには重い意味がある。この学生も、フランソワーズと同様、もうひとりの学生からの「他者の眼差し」にさらされていた。就職活動の失敗、他者の存在、グループの分裂、それらは未熟な自我にとって、並々ならぬ問題である。

こうした状況は、学生の間にはしばしば起こっている。一昨年には、離反した学生が追い詰められて、自殺未遂まで起こしている。離反しようとする学生といえども、その自我は極めて脆弱であって、その時は、自律の意志が揺らいで、グループに戻ろうとしたが、阻まれて居場所を失ってしまった。今回の場合、どうやらこの日記を書いた学生が、もうひとりの学生の厳しい眼差しから逃れるために、仲間への友情と離反の狭間で苦悩しつつ、グループを割ったけはいがある。かれらは、親世代の自我の未成熟、世代間交流の断絶、自我発達のための教育の欠如、社会的無関心といった状況の中で生まれ育ってきた社会的『孤児』なのであって、自我を確立する環境にはなかったのである。

こうした原因を遡れば、われわれの世代、すなわちかれらの親世代の責任であることは明白である。われわれは親世代の生き方を十分批判することもせず、モラトリアムを決め込むうちに体制に引き摺られ、勤労者としての役割に縛られて、本来果すべき多重的な社会的役割を見失ってしまったのである。しかし、これ以上、この子供たちの状況を放置するならば、かれらは『子殺しの世代』と呼ばれることになってしまうかもしれない。

われわれが教育として取り組まねばならぬことは、自閉集団以上に居心地のよい、しかも機能的な「教員-学生ネットワーク」を構築することである。そうしたネットワークは、学内ネットの活用、研究室の解放といった手段によって、教員と学生との日常の交流を密にする以外には作りえない。そして、その交流には、かれらの記述したものから、その存在性を生き生きと浮かび上がらせるという行為が、不可欠のものとして含まれているのである。

・ 個性のうちに普遍性

1. 乗り越えられるべきものとしての小スキーマ

Merleau-Ponty は、上掲の論文の中で、新しい科学として、まずもって取り上げたゲシュタルト心理学も、その生みの親であるベルリン学派に巢食う科学主義によって、みずからその発展を遅滞させたと告発している。⁷⁾ 大きなゲシュタルトが単純なゲシュタルトに基づいて理解されるか否か、それは今もって不問に付されたままである。わたし自身は、比較的小さなゲシュタルト（スキーマ）を中心に考えてきたが、⁸⁾ しかし、それでもなお、大きなゲシュタルトが小さなゲシュタルトのモザイクであるとは考えてはいない。ただ、個々の述語や個々の存在に対して、それぞれに小さな比較的匿名的なスキーマが存在することは確信しているし、G. Lakoff や M. Johnson の主張する運動感覚イメージ・スキーマ⁹⁾ に対しても仮説として非常に興味を引かれている。また、認知行動療法の考え方の中心にある、個に抱え込まれている病的スキーマの両義化という処方に対しても、これまで表明してきているように共感を抱いているし、みずからも用いてきたものである。わたしにとって、比較的小さなスキーマは、そこに含まれる基本論理が単純で、その機能性が把握しやすいということがあるからであるが、しかし、そうした一面的な機能の機械的運用については、Merleau-Ponty の厳しい批判を受けねばならぬことであり、慎まねばならぬことである。実際、それによって、わたし自身しばしば大きな過ちを犯してきている。人間は確かにそうした小さなスキーマを保有しているように見えるが、それはまたもっと全体的な一側面に過ぎないのであって、たとえば、あるスキーマを両義化すべきであるなら、¹⁰⁾ それはまさにそのスキーマが両義化できない諸事情にあったということの証なのである。しかしそれでもなお、その絶対性が当人を苦しめている直接の原因である以上、その両義化そのものの必要性は否定されることはできない。われわれはこうした事態に出会うときに、はじめて意識は新たな関連性に関われるのであるが、しかしこれは保証されたことではない。意識はズレによって喚起されるとしても、そのズレの多くは日常性の中に曖昧化されてしまうからである。¹¹⁾ Merleau-Ponty

の形而上学、すなわち「分割不能な生きた形態性」ということが思い出されねばならぬのは、まさにこの場面なのである。

2. 個別的なものに分有された類型から普遍へ

わたしには、それが<まさしくわたしのもの>であることを確信する責務が常に負わされている。その責務は、人格をかけた対象の観察と記述、それに対象への共感によって、果されねばならない。そして、これが普遍に向かう道であるという確信をわがものとせねばならない。Merleau-Ponty は次のように言う。

「わたしには、わたしの生が、絶対的に個別的なものであり、かつ絶対的に普遍的なものであるように思われる。」¹²⁾

また、しばしば引用しているが、Adorno も、「否定弁証法」¹³⁾、第二部 否定弁証法 概念とカテゴリー の<14 布置関係(Konstellation)>で、前節<13個別的なものも究極的なものではない>に続いて、次のように言っている。

「(個物の核心は、あの極度なまでに個体化された、あらゆる図式を拒否する芸術作品に比べることができる。そうした対象の、個別化の極みの中に普遍の契機が再発見される。それは自分でも気づかぬまま、ある類型を分有している。) こうした普遍の契機は、抽象という方法によらなくても、諸概念を布置関係の中に配置することで見出される。この布置関係のもとでは、分類のやり方にとってはどうでもいいもの、厄介者にすぎない対象の特質が照らし出される。このことをよく示すモデルは、言語の働きである。言語は、幾つかの概念のある事物のまわりに集めて互いに関連づけ、その関係を通じてそれらに客観性を与える。概念がその内部でとうに切り捨ててしまったもの、概念がそれでありたいと思いながら、到達できないこの「概念以上のもの」は、ただ布置関係によって外から表すしかない。認識されるべき事物のまわりにさまざまな概念が集められると、それによってこれらの概念は潜在的に事物の内面を規定することになり、思考が必然的に自分の内から排除したものを、思考しつつ獲得することになる。」

こうした認識にとって本質的なことは、多くの個を実際に記述することによって、各個に分有された類型を実際に見いだすという経験、すなわち各個の周囲に、諸概念の布置関係を構築することによって、実際にそれぞれの内面が規定されるという事実に触れる経験であろう。筆者にとって、それは個物であろうとしている学生の「見え」表出の認知分析であった。かれらの個的な表出は、かれらの固有な精神的構造を示しながら、さらにその背後に、例外なく<自己の存在感を追い求める姿>¹⁴⁾を分有していたのである。

3. 生きた結びつきこそ

また、前回「存在性の諸命題」の中でも簡単に論じたように、このように現象化される存在は、生の諸矛盾を抱え込んだ生身の人間によって経験されるものであって、こうした諸矛

盾を見かけ上解消する目的で概念化された構築物とは両立しない。Merleau-Ponty は、これについて、次のように論じている。

「体系が経験のあらゆる局面をそのまま共立可能にし、ともに成り立たしめる諸概念の配列だとしたら、体系は、形而上学的意識を抹殺し、同時に、道德性をも抹殺する。」

「絶対的基礎に訴えることは、それが無効でないときには、おのれが基礎づけねばならない当のものを破壊してしまう。」

「人間の視角の外では、真理とか価値というこれらの概念がまったく意味を失ってしまうということを理解するそのときには、世界はふたたびその起伏を取り戻し、わたしがばらばらな経験を採りあげなおす検証とか価値評価というような特殊な行為が、その決定的な重要性を回復することになり、真と偽、正と不正に関する認識や、それにもとづく行為にも——そこに絶対的明証を見いだそうなどとは、望まないからこそ——揺るがし難いものがあることになるのだ。」

「形而上学的意識や、道德的意識は、絶対者と接触すれば、死滅する。こうした意識は、習慣的意識や眠れる意識の平板な世界の彼岸にあるもので、それ自体が、わたしとわたし、わたしと他者、との生きた結びつきだからである。」

「形而上学とは、われわれの有するパラドクスを解消しようとして造り上げる概念の構築物などではなく、われわれが個人の歴史や集団の歴史の、あらゆる状況の中で、このパラドクスについてなす経験、すなわち、そのパラドクスを引き受け、それを理性に転じる行為のことなのだ。」¹⁵⁾

要するに、存在というものが現象化するのには、生の矛盾を抱え込んだ当のわたしが共感して、それを〈まさしくわたしのもの〉にした結果であって、決して外来の概念で囲い取ったようなものではないのである。その共感を、Merleau-Pontyは、「生きた結びつき」と言っているが、別の箇所では、「交流」、「不思議な親和力」、「同一性の認識」、あるいは「秘密の絆の意識」とも表現している。それは、その結びつきそのものが、生の諸矛盾の上に成立したそれだけ豊かな形態であることを、物語っている。〈まさしくわたしのもの〉であってこそ、思考は揺るぎなく成り立つのである。

．おわりに

半世紀以上も昔の古い論文を引用することは、大いに気が引ける。こうした構造主義の考え方は、人間諸科学の中に発展的に解消されたと考えられているからである。確かに、認知心理学もその系譜の一つではある。しかしそれでもなお、われわれは、余りにも多くの遺産を、抑えても抑えても頭をもたげてくる科学・実証主義との妥協の中で、変質させ無価値なものにしてしまった可能性がある。わたしなどは、そうした科学・実証主義の中で教育もされ、そこにむしろ魅力すら感じてきたのであるが、研究の対象を物理的な自然から、生態学的な自然や人間に移し変えてみると、布置関係の記述や、〈まさしくわたしのもの〉である主観的な把握が、いかに事態の把握にふさわしいかがよく体験されるのである。人間とは、生

の矛盾を引き受けながら、形態として存在を把握するようにできている観測装置であるということが、もっと広く経験的事実として認識されているならば、中心と周縁を取り違えたような、文字通り自分が何を語っているかを知らないような科学的研究というものは駆逐されていたに相違ないし、もっと幸福な世代を作り出してやれたのかもしれないと思うのである。

註

- 1) (1), pp121-143.
- 2) (1), p127.
- 3) (1), p142.
- 4) (1), p137.
- 5) (1), pp37-60.
- 6) (10), , 3, p87.
- 7) (1), pp123-124.
- 8) (3)~(14).
- 9) (15), (16).
- 10) (14), ~ , pp38-41.
- 11) (2), , pp147-148.
- 12) (1), p137.
- 13) (17).
- 14) (10), , 1, pp77-78. (12), , 2, pp109-110. (14), , , pp38-41.
- 15) (1), pp138-140.

参考文献

- (1) Maurice Merleau-Ponty(1948) *SENS ET NON-SENS*: Les Editions Nagel, Paris.
木田 元 他訳(1995) 意味と無意味：みすず書房
- (2) 丸山博道(1993) ‘概念化の過程と知覚循環’ 名古屋女子商科短大経営研究所年報 **5** 141-150
- (3) 丸山博道(1994) ‘認知科学の新しい動向と課題 - 図式と隠喩と実在感による認知の構図 - ’ 名古屋女子商科短大紀要 **34** 127-149
- (4) 丸山博道(1994) ‘知の戦略的スキーマ’ 名古屋女子商科短大経営研究所年報 **6** 127-138
- (5) 丸山博道(1995) ‘『方法序説』における知の戦略的スキーマについて - Descartes の戦略 - ’ 名古屋女子商科短大紀要 **35** 111-138
- (6) 丸山博道(1995) ‘知の戦略的スキーマから見た『空疎な自己』について’ 名古屋女子商

丸山 博道

科短大経営研究所年報 7 185-198

(7) 丸山博道(1996) ‘ 知の戦略的スキーマから見たカント批判哲学 ’ 名古屋女子商科短大紀要 36 53-76

(8) 丸山博道(1996) ‘ 知性の開拓について ’ 名古屋女子商科短大経営研究所年報 8 143-161

(9) 丸山博道(1997) 自己実現のための基本理念について ’ 名古屋女子商科短大紀 37 129-145

(10) 丸山博道(1997) ‘ 自己の存在確認と知的スキーマとの包括的関連 ’ 名古屋女子商科短大経営研究所年報 9, 77-95

(11) 丸山博道(1998) ‘ 知の戦略を相互了解性に関いて行く問題について ’ 名古屋女子商科短大紀要 38, 199-217

(12) 丸山博道(1998) ‘ 知的スキーマの包括理論から見た幸福について ’ 名古屋女子商科短大経営研究所年報 10, 109-115

(13) 丸山博道(2001) ‘ 存在性の諸命題 ’ 名古屋経営短大紀要 42, 91-102

(14) 丸山博道(2001) ‘ 認知分析の現象論的意味 ’ 名古屋経営短大経営研究所年報 13, 37-43

(15) Lakoff, George(1987) *WOMEN, FIRE, AND DANGEROUS THINGS - What Categories Reveal about the Mind*: Chicago Univ. Press. 池上嘉彦 他訳(1993) 認知意味論: 紀伊国屋書店

(16) Johnson, Mark(1987) *THE BODY IN THE MIND - The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason* -, Chicago Univ. Press. 菅野盾樹・中村雅之訳(1991) 心のなかの身体: 紀伊国屋書店

(17) Adorno, Theodor Wiesengrund (1966) *Negative Dialektik*. 木田元 他訳(1996) 否定弁証法: 作品社